

江戸時代の剣の思想
—漫画”バガボンド”に描かれる思想を題材にして—
The idea on sword of the edo period
—Using the idea in the comic"vagabond"—

1K09B012-1

石井悠平

指導教員 主査 寒川恒夫 先生

副査 瀬戸邦弘 先生

【目的】

「天下無双は陽炎。ただの言葉。近づいたら消えた。だが、ならば石舟斎のじいさん、なぜあんたは今も剣を振る？」これは漫画『バガボンド』にある台詞である。『バガボンド』は漫画家、井上雄彦が1998年から雑誌『モーニング』に連載を始め、2012年12月現在34巻まで単行本が発売されているロングセラー作品である。そのバガボンドのなかに、冒頭のようなシーンがある。このシーンは主人公である宮本武蔵が柳生石舟斎に対して、疑問の言葉を投げかけたシーンである。マンガで、武蔵は剣の道を究めるべく、天下無双を求めて浪人として諸国の剣豪を訪ね歩く。武蔵はついに柳生石舟斎を倒そうと柳生の里に乗り込むのだが、武蔵は石舟斎に天下無双の称号について、そんなものはただの言葉である、と一蹴されてしまうのであった。筆者は、この武蔵の台詞から本論文のテーマを、起草したところが多い。実際に武蔵が生きた時代も、漫画が設定している時代も、もはや戦乱の世を終え、泰平の時代を向かえようとしていた江戸時代の初期の設定であった。そのような時代にあつて自らの剣の価値について疑問をもった武士たちは数多くいたように思える。自らの剣で出世をねらい、最強を目指すことに価値を持てなくなったとすれば、戦乱の世が終わり、人を殺すために戦う必要がなくなったとしたら、武士たちはいったいどのような思想を持って、後の約300年の間も剣を振るにいたったのであろうか。人を殺すこと以外に剣に価値があるとしたらそれはいったいどのような価値なのだろうか。これらを研究することが本論文の目的である。

【方法】

本論文では文献調査を行う。資料として用いるのは、江戸の思想として代表的な朱子学、陽明学、禅といった剣の思想に影響を与えたとされるものを使う。また、それらの資料から得た知識を通じて、バガボンドを読み解くという作業を行う。しかし、これはマンガであるバガボンドを読み解くことで武蔵や武蔵に関わった人物たちの関係性を明らかにすることが目的でない。フィクションであるバガボンドには、マンガの中の武蔵や石舟斎、沢庵といった登場人物に対して、歴史的な事実を求めることは難しい。しかし、登場人物たち

がみせる所作には江戸の武士たちが、どのように考えて剣を振っているのかについて考えるヒントがちりばめられている。そのようなマンガのワンシーンを切り取り、文献から引用した文と比較して、武士の剣に関する思想を考察することとする。

【結果】

禅の思想の観点から見ても、朱子学の観点から見ても、江戸の武士は「戦いを起こさないために、剣の修練を積む」という逆説的な結果に至った。禅の観点からすれば、「兵法家伝書」にあるように、殺人刀から活人剣へ、活人剣から無刀へと、如何に人を殺さずにすむかという方向性があった。さらに、剣の修練で得た常の心をもっていれば、我執や引け目を捨て、心の乱れはなくなり、武士たちが対峙したときに斬りあいはなくなる、と言う結果となった。一方の朱子学の観点からすると、復性して、性即理となり、本来の自分へと帰ることで聖人(理想的な人、誠の人、他により影響を与える人)になることが焦点となった。朱子学では学問することで聖人に近づけるとするが、居敬、窮理の2点を柱とするという点では、剣の修行を通して、聖人に近づけることが分かった。聖人となり、格物致知して万物の理を知れば、性即理となって己とその他すべてのものは一つであるという境地に達することが出来る。このような場合にも、万物は一つであると言う意識から、敵も見方もない、戦いの起こらない状況をつくり出すことが出来る。

【考察】

泰平の世の剣は、ついに幕末に、陽明学に過激な影響を受けた者たち、大塩平八郎(1793～1837)らによって、反乱という形で「如何に戦わないようにするか」の思想は大きく破られることになる。しかし、ここまで考察してきた思想には、時代を超えて受け継がれるべき平和の精神が、人物の大成、ものの道理を極めるといった手段で残されていると感じた。物質主義、競争原理の働く現代において、万物一体、常の心といった思想の側面を再考することは、われわれの生活を根本から豊かにするものだと感じる。